

平成15年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

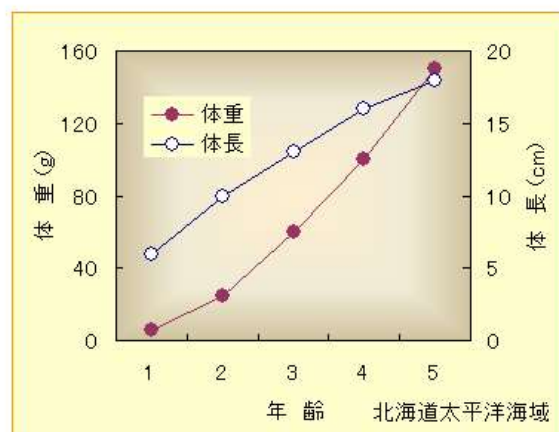
系群名 道東・道南

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特徴

寿命： 不明
成熟開始年齢： 不明
産卵期・産卵場： 冬～春季（2～5月、道東）、産卵場は不明
索餌期・索餌場： 北海道太平洋側沖合の一带に分布し、主な分布水深は300～900m
食性： クモヒトデ類、ヨコエビ類、エビジャコ類、多毛類など
捕食者： マダラ（被食量は多くないと考えられる）



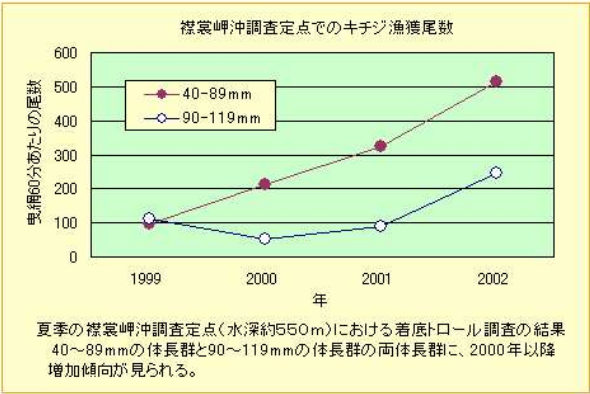
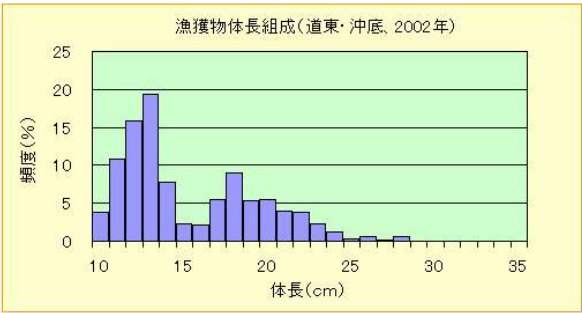
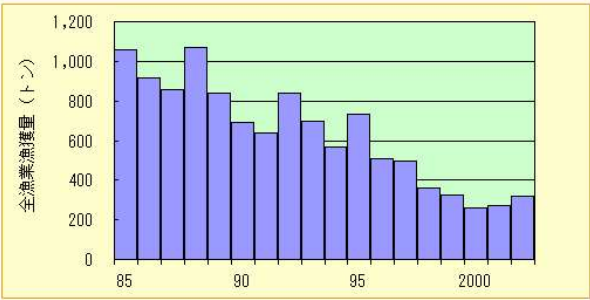
漁業の特徴

沖合底びき網（沖底）の他、えび桁網や刺し網などの沿岸漁業により周年漁獲されている。近年の漁獲量は、沖底よりも沿岸漁業の方が多い。また、道南よりも道東で漁獲量が多い。

漁獲の動向

道東と道南における沖底と沿岸漁業の漁獲量は長期的には減少傾向にある。1985年まで1,000トンを超えていた漁獲量は、1997年に500トンを割り込み、1999年以降300トン前後にまで減少した。漁獲量は、2000年以降はわずかながら増加し、2002年には320

トン（暫定値）となった模様である。1980年代末以降、沿岸漁業の漁獲量が沖底を上回っている。

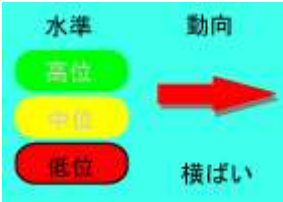


資源評価法

漁獲物の主体となる魚体の年齢と体長の関係が不明であり、年齢別漁獲尾数の算出が困難であることから、漁獲量の年変化と漁獲物の体長組成から資源を評価した。漁獲量の集計には、沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計年報、及び北海道水産現勢元資料を用いた。また、漁獲物から採集した標本と銘柄別水揚げ記録を用いて、漁獲物の体長組成を推定した。

資源状態

各海域の漁業種類別の漁獲量データが揃う1985年以降の過去18年間（1985～2002年）の漁獲量の値から、現在の資源水準は低位と判断された。また、1998年以降5年間の漁獲量の変化から、資源動向は横ばいと判断された。2002年の漁獲物の体長組成を見ると、道東海域では毎年小型魚が漁獲されていることから、豊度の高い年級群の出現を確認できなかった。道東・道南海域では、漁獲物の大半が未成魚で占められており、親魚への添加が十分でないと考えられ、加入乱獲に陥っている可能性が高い。但し、2000年以降の漁獲量は、わずかながら増加している。また、調査船による現存量調査の結果から、2002年の資源量は増加した可能性があり、少なくとも1999年以降、幼魚の分布密度は上昇傾向にある。



管理方策

漁獲量の変化から資源状態を判断し、漁獲量に適切な係数を掛けた値をABCとする。資源回復を念頭に置いた場合、現状の漁獲圧を下げる必要がある。資源回復のための係数を0.8として、1998～2002年の漁獲量の平均値に乗じた。資源の減少傾向が止まった可

能性はあるものの、現在の資源が極めて低い水準であることに変わりはない。未成魚を成熟まで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される。従って今後とり得る方策としては、漁獲努力量削減はもちろんであるが、加えて若齢魚の保護対策として、漁獲物の体長制限や、生育場の禁漁措置が必要と考えられる。

	2004年ABC	管理基準	F 値	漁獲割合
A B C limit	246トン	0.8Cave5-yr	-	-
A B C target	197トン	0.8ABC limit	-	-

資源評価のまとめ

- 各海域において、漁獲量は長期的には減少傾向にある
- 現在の資源状態は極めて低い水準にある
- 2002年の漁獲物では、豊度の高い年級群の出現は確認できない
- 1999年以降、幼魚の分布密度は上昇傾向にある

資源管理方策のまとめ

- 漁獲努力量の削減が必要
- 未成魚を成熟まで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される

資源評価は毎年更新されます。